

## 中国を見つめて

学校教育学部学生 佐村 恵子

1989年春、私は語学研修の目的で、北京を訪れました。私にとって中国来訪はこれで3度目であり、1度目は団体で3日間の友好訪問として、2度目は1か月の自由旅行として、そして今回は1年間の留学としてであり、中国に行く度に、中国への関心が深まっていくのを感じていました。

私の留学先は「中央民族学院」といって、北京市の郊外にあり、その名の示すとおり、各地方から様々な民族の青年達が寄り集まっており、漢族はわずかにすぎないという、国家民族委員会管轄の大学です。中国には実に56の少数民族がいて、それぞれに又異なる言語を持っています。広く使われている広東語でさえ、すでに北京語とはまったくと言っていい程異なっており、また中国紙幣には5種類もの言語による文字が記されていることなど、中国ならではと言えます。日本でいう中国語とは普通、北京語を指していますが、それは漢語つまり漢族の言語であり、中国ではこれを「<sup>フンカフ</sup>普通话」と呼んでいます。同じように台湾でも「<sup>クオイー</sup>国語」と呼び、数多い中国語の中の公用語としているのです。

そのように、種々の民族がそれぞれに異なる言語体系を持ち、独自の風俗、習慣で今なお生活しているという多民族国家であるが故に、チベット自治区における独立問題など、数多くの問題を抱えているということも現実です。中国という国を見る時、北京のように急速に大都会へと変わりゆく地域がある反面、独自性を守りながら、昔ながらの生活を続けてゆく地域、あるいは続けざるを得ない地域もあることを、見逃してはいけないと思います。さて、私の中国における生活も順調にすべ

り出しましたが、4月19日の胡耀邦の死で、大きく変わりました。彼の死から始まった学生デモが段々と激しくなっていく中、私は毎日午後の自由時間を、北京動物園や第一の繁華街王府井や、天安門広場へと足をのぼしたり、友達になった中国人学生と会話練習をしたりしながら、新しい生活を満喫することに夢中になっていました。

そして、まさかと思っていた政府の武力による鎮圧が、6月4日の天安門事件という形であらわれ、私達は帰国勧告に従い、勉学を中断し中国を去らなければなりません。日本に帰ってから1か月半の間、再び中国に戻れるのだろうかという不安に駆られながら、先生方の涙と喪服の意味を考え、国家に対し口を開くすべもない中国民衆の悲しみと怒りを知り、そして個の人間として当たり前であるべき表現の自由も、日本においてさえ「憲法によって保障」という有形のかたちをとらなければならない事などについて、改めて考えさせられました。

7月半ば、予想外に早く渡航の許可がおり、私は再び北京の地を踏みました。何人もの人々が虐殺されたと言われる長安街も西単の街も、以前と変わらず人々が行き交い、まるで何事も起こらなかつたかのような様子に、とまどいを感じるほどでした。けれど、表に感情を出すことを長年押さえ続けてきた中国の人々が、普段やり場のない感情なだけに、一たびきっかけを掴むと、あの100万人デモの日のように団結するほどの力を持っていることに羨望を感じるとともに、中国は民衆の力によって変化することを信じずにはいられません。